

## 体制転換十年の風景

### 人気急落のハンガリー政権

ハンガリーの政局も動揺している。森政権と同様に世論調査の政権支持率は下がり、連立少数与党の小地主党などは選挙がおこなわれると議席が確保できない 5%ラインを下回っている。あれもこれも元をたせば、身から出た錆。森政権と同じというのも比較政治の視点から面白い。

初めから小地主党に政権担当能力がないのは分かっていた。しかし、FIDESZ としては社会党に頼らない政権を樹立するのに、小地主党との連立は必要悪だった。政治は金なり。この格言はハンガリーにもぴったり当てはまる。ハンガリーの連立政府は、連携する政党間で省庁の管轄を分け合う。省庁に付く国家予算をそれぞれの政党が支配するという構図である。相互に干渉されない管轄省を確保することで、与党となるうま味が吸えるようになっている。

### 小地主党の省庁私物化

小地主党が確保したのは、農業・地域開発省、環境庁、運輸・通信相、防衛省の 4 省。小地主党の環境省支配が決まった途端、環境省から有能な専門家流出し、代わって小地主党の政治家や学者が主要なポストを固めた。環境大臣ペポーは政治家としてもまったくの素人かつ無能で、学者としての常識も疑われる人物。大臣になってから、自分の所属している大学の研究室プロジェクトへの資金援助申請を、環境省や農業・地域開発省に提出するという音痴ぶりだった。管轄業務に関係のない物品の購入などが暴露され窮地に立ち、トルジャン党首もしぶしぶ大臣の交代を認めたのが、2000 年春。

新しく大臣に就任したリゲットヴァーリは、なんと「トロイの木馬」だった。新大臣の任命が終わったところで、実はリゲットヴァーリが 1990 年の総選挙で社会党から立候補した人物だと分かった。トルジャンは後悔したが後の祭り。それほど小地主党に人材が不足している。有能な新大臣は 2 年弱にわたる小地主党支配の環境省の内部監査を実行し、次から次へと不明朗な予算支出を暴露した。小地主党幹部の省予算の横領、付属研究所長の予算の無駄使いなどが、連日、新聞・テレビで報道された。付属研究所の清掃のために、月百万フォリントのお金が小地主党の政治家が所有する会社に流れていたり、マリアレメテ教会のカントールが自分の CD を出すために研究所予算から支出するなどの事実が明らかになった。そもそもそのような人物が環境省の付属研究所長になることがおかしいのだが、とにかく小地主党に人材がない。私が払っている多額の所得税も、こうやって小地主党の連中に無駄使いされているのかと思うと、やりきれない。

これに慌てたトルジャンは、自ら襟を正すというのではなしに、リゲットヴァーリの更迭を画策した。ここが日本と違うところだ。彼の言い分が面白い。大臣は省内の犯罪を捜査・立件するために居るのではない。リゲットヴァーリは大臣の仕事を適切に行っておら

ず、検察がおこなうような仕事をおこなっていて不適當な人物だとし、オルバン首相に更迭を進言した。本末転倒とはこのこと。本来は党の責任者としてトルジャンが大臣を辞退し、党の再生に専念するというのが常識だが、少数与党の FIDESZ はこれを飲むしかない。オルバン首相は渋々この更迭を了解した。12 月 1 日付けでリゲットヴァーリは大臣を下りることになった。この直後の世論調査で、小地主党の支持率が 3% と過去最低の水準に落ち、FIDESZ の支持率も社会党を大きく下回ることになった。当然の結果だろう。

## 青ランプの使用実態

小地主党の不始末はこれに留まらない。すでに国会議員 2 名が公金横領・恐喝・詐欺容疑で捜査・起訴の対象になっている最中に、運輸・通信大臣が交通事故を起こした(11 月)。ハンガリーの公用車の事故や事件の多さは良く知られている。運手の仕方が乱暴だというほかに、公用車そのもの数が多すぎるのではないだろうか。オルバン首相の子供を習い事へ運ぶ RV 車が、運転中に強盗に会い、車が奪われるという事件があった。この RV 車も公用車という。いったい何台の車が公用車になっているのだろうか。盗難にあった公用車も多い。今の連立政権が成立してから、大臣が使う公用車の盗難数は一桁では済まない。それもアウディの A 6 や A 8 タイプの高級車だ。大臣が私的に利用する公用車もあり、スポーツ大臣のドイッチも、車を盗まれている。運転手の不注意で駐車中や車庫入れの最中に盗まれるようだが、こんな話は発展途上国並だ。

さて、運輸・通信大臣ノグラディはバラトン湖沿いの道路を 130 キロ以上のスピードで運転させ、トラバントの側面に衝突した。トラバントの運転手の青年は間もなく死亡し、同乗していた女性も数週間の治療の甲斐もなく死亡した。大臣もヘリコプターで病院に運ばれる怪我だったが、二つのことで非難を浴びた。

一つは、大臣はヘリコプターで運ばれたのに、車で運ばれた青年は病院に着いて間もなく息を引き取った。大臣と同じようにヘリで運び、もう少し早く処置していれば、一命をとりとめたかもしれない。

もう一つは、公用車の青ランプの使用違反。公用車が青ランプを点滅されたり、サイレンを鳴らす場合には、その要件を満たす必要がある。しかし、とくに急ぐ理由のないのに、公用車が青ランプを点滅させて移動することは禁じられている。この事件の後、青ランプの許可実態が暴露された。SZDSZ のクンツツ議員団長は「子供が乗車して青ランプで走っている車を見た」から、多分、かなり恣意的な許可の出し方がなされているのではないかと疑問を呈した。パトカーに女房を乗せて走るのはそれほど珍しいことではないから、ありうる話だ。案の定、各省庁の局長連中がこぞって青ランプの付けているという話が広がった。

そうこうしているうちに、11 月 24 日付けの週刊誌 *Élet és irodalom* に、「青ランプ( *kék fény* )」という記事が出た。オルバン首相が首相府顧問の 1 人の青ランプ申請に許可した書面、その許可にもとづき閣僚会議から警察本部長宛に出された許可願いのコピーが掲載さ

れた。後者の申請書には、手書きで、「首相が許可しているのだから、この書面を検討する必要はない」という注意書きが書き込まれている。

もう一つのコピーは、最近任命されたばかりのポルト検事総長が、行政担当の検事総長次席の1人に申請した青ランプが却下されたことにたいし、再度、警察本部長に宛てた申請願いが掲載されている。検事の捜査において青ランプの使用は不可欠だから、許可してほしいと。しかし、検察庁の行政担当検事総長次席は捜査を担当することはない。

この書面のコピーが流れたことで、警察本部はコピー流出の捜査を開始すると宣言した。そういえば、ポシュタ銀行のVIPリストが日刊経済紙 Világgazdaság に掲載された時も、銀行機密の遺漏の容疑で編集局を捜査した。ハンガリーでは、事の重大さより、文書流出の責任を問う。当該問題の捜査をきちんと行ってからにしてもらいたいものだ。

### トルジャン邸の建設騒動

小地主党への批判を決定的にしたのは、トルジャンが12区に建設を進めている邸宅だ。3階建て、エレベーターとプール付きの邸宅の建設が進められている。社会党政権時代に、トルジャンはホルン首相が建てた自宅の資金源を明らかにせよと迫ったことがあり、ホルン首相は記者会見を開いて、資金の出所を説明するはめになった。ところが今度は、トルジャンがその役に回った。

それというも、国会議員には資産公開義務があり、2年前の議員当選後の公開では、2区にあるアパート120平方の住居を妻と共有のほか、ソ連製ラダ1台を所有するという白々しい報告をおこなっていたからだ。いったいこの資産でどうやって数億フォリントは下らない邸宅が建設できるのかと、連日、テレビや新聞が騒ぎ立てた。

トルジャンの言い分が面白い。「自分はスター弁護士だったし、妻はオペラのプリマドンナだったから、その程度の資産を稼ぐのは訳もなかった。ただ、公表した分が少ないのは、泥棒や強盗の目から逃れるためだ」とテレビの前で臆面もなく主張したのだ。厚顔無恥とはまさにこのことだろう。皆あっけにとられた。いったいトルジャンの女房はどこのオペラ歌手だったのか。トルジャンはいつスター弁護士だったのか。女房はペーチ出身だが、ペーチにオペラハウスはない。劇場で歌を歌っていたのだろうが、田舎の劇場で得られる収入など、高が知れている。ポピュリスト・トルジャンの弁明は、いつもこの程度のものだ。

この一件で後から周知されたことだが、国会議員の資産公開には公開部分と非公開部分があり、議員はどの資産を公開するか選べるというのだそう。これではいったい何のための資産公開か分からない。オルバン首相は、この制度は社会党政府が作ったのだから FIDESZ に責任はないという。ともかく資産公開法が改正する手続きに入ったのは、一歩前進と評価すべきだろう。

年末になり、国会ではトルジャンの資産形成に利益誘導による資産形成の疑いがあると調査委員会の設置を決定した。トルジャンも野党議員の資産形成を問うことで反撃の姿勢

を見せている。少なくとも、国会議員による資産形成の実態の一部が明らかになりつつあるのは興味深い。

## オイル・ゲート

2000年のハンガリー国会を揺るがしている事件の一つに、90年代初期の石油密輸事件がある。その解明のために国会に2000年に「石油委員会」が設置された。委員長は小地主党のパラグ・ラスロー。彼はなかなかの頑張り屋で、経済的な利益を追求する他の小地主党の政治家とは一線を画する貴重な存在だ。

石油委員会はハンガリーの石油自由化以後に急成長した石油マフィアの実態を解明するために設置されたもので、当初から政治家や国家機関（警察幹部、税関幹部、地方警察幹部）の関わりを明らかにすることが暗黙の了解だった。この委員会で二つの爆弾証言がおこなわれた。

一つは石油マフィアのメンバーだったノグラディ（運輸大臣とは別人）の証言で、もう一つは特別捜査官で「闇の帝王」と呼ばれた人物の証言である。双方の証言には、多くの政治家の名前、全国および地方警察署長、税務署長の名前が出てくる。ノグラディの証言には眉唾のところもあるが、かなりの政治家や警察官がかかわっていることは間違いない。

これにたいし、頻りに名前が出されたピンテル内務大臣（前政権で警察庁長官）がパラグ委員長を名誉毀損で告訴する事態にまで発展した。社会党の前副委員長のチンタラン・シャンドールも二つの証言に頻りに出てくる名前だ。彼などは、10年前までは、2DKの公営住宅に借家住まいする労働組合幹部だった。今ではローマイフルドゥーに豪邸を構える身分になっている。

ところがこの石油委員会、委員会設置の期限が切れたので、2000年いっぱいでもう解消しようということになっている。パラグを出した小地主党も、オイル事件はもう十分だからもう止めにしようというわけだ。連立政府にとって良い材料が出てこないのも、得るものがない。

政府だけでなく、検察もやる気はない。ポルト検事総長などは、ろくに調べもしないうち、政治家はかかわっている証拠はないなどと宣言する始末だ。そんなに簡単に言える事柄ではないはずだ。疑惑の政治家といっしょに委員会に呼ばれ、政治家と談笑している光景は、まさにハンガリー的だ。いったいこの国には国の将来を思い、正義と公正のために闘うという青年はいないのか。

## 政治家の世代交代

日本では4人組とか5人組というような発展途上国並の政治家支配がおこなわれているからあまり大きなことは言えない。少なくともハンガリーでは青年が政治の実権を握ろうとしている。そこは評価したい。しかし、オルバン首相率いるFIDESZには失望した。朱

に交われれば赤くなる。学生運動家だったオルバンも、今や汚れた政治にたっぷり浸かっている。FIDESZ から若さや清新さがなくなった。正義と公正のために闘わない若者に魅力はない。

SZDSZ は 12 月の党大会で、ブダペスト市長のデムスキーが党首になり、この党の首相候補として 2002 年の総選挙に向かう。ここでは少なくとも、世代交代がおこなわれた。

複雑なのは社会党だ。若返りがここ 10 年の課題だが、有力な若手が見あたらない。前政権時代の社会党自身の腐敗を批判し、新たな時代を担うリーダーとなる青年が見あたらない。ホルン首相の後を継いだコヴァチは、ネーメット（旧体制最後の首相）登場までの繋役と見られていたが、意外と党内把握に自信を持ち、ネーメットに譲る気持ちはない。

他方、社会党最後の切り札と見られたネーメットも、多くの点で勘違いしている。前体制最後の首相としてベルリンの壁崩壊に寄与した人物というのが彼の評価だが、これは過大評価。彼は 1990 年の総選挙では、社会党を離れ、無所属で当選したが、これは社会党では勝てないというしたたかな計算にもとづくものだ。その後すぐに欧州復興開発銀行（EBRD）の副総裁に任命され、以後 10 年、ハンガリーの政治から離れた。子供たちもすべてイギリスとアメリカの学校へ通わせ、ハンガリーとの接点はない。

もともと、彼は経済大学のエリート学科（国民経済計画学科）から計画庁研究所に進み、そこから労働者党書記局に入った。党内に能力のあるエリートがいなかったことで、瓢箪から駒のように一躍 88 年 11 月に首相に任命され、その後の歴史の役回りを与えられた。党組織を引っ張ってきた経験はないから、泥臭い仕事ができない。若くして祭り上げられたことで、錯覚が生じた。歴史の波のなかで、能力とは無関係に、人に役割が与えられていく。森首相がその典型だ。ネーメットにしても、自分の能力と実力で頂点に立ったと考えたとしたら大間違いだ。要領の良い立ち回りで、その役割を得たというのが真実だ。

EBRD を辞める直前、すべての党派が賛成してくれれば、グンツィ大統領を継いで大統領を引き受けても良いと考えていたようだが、この発想などは政治局員だった当時の発想とそれほど変わらない。世間はそこまで甘くない。さんざん外国で甘い汁を吸って、そこから大統領へ横滑りするなど、あってはならないことだ。

その芽がなくなった頃に、EBRD からハンガリーに戻ってきた。EBRD 時代の高給の蓄えや年金があるから、生活に何の不安もない。後は社会党の首相として、再び表舞台に立つことを考えているようだが、ここでも問屋が簡単に卸してくれないことが明らかになった。政治は力だ。10 年もハンガリーを空け、党内組織を掌握していない人物がどうやって社会党の頂点に立てるのか。コヴァチがネーメットに地位を譲る理由がない。そう考えていたとしたら、政治家として失格だ。その面では加藤鉦一と似ている所がある。

それでも、野中・青木・亀井・村上・森などの老人政治屋が支配するより、加藤・鳩山・菅などが支配する政治に期待できるのと同じように、ハンガリー社会党でもコヴァチが率いる昔日の人々が支配するより、ネーメットを担ぎ上げる若手の方が増しなことは言うまでもない。ただ、社会党の有力な若手経済学者が皆、腐敗に填ってしまい、新鮮さを打ち

出せない閉塞感は強い。支持率は高くても、悩みが多い社会党である。

体制転換から早 10 年過ぎたが、ハンガリー社会はまだ体制転換の途上にある。